

人はなぜフェイクニュースを信じてしまうのか

最近ニュースでフェイクニュースという言葉をよく見かける。フェイクニュースとは、偽りの内容が意図的に流されているニュースのことを指す。とりわけインターネットでそのようなフェイクニュースとされる内容が多く流れていることが、最近では社会問題となっている。ネットで流れてくるフェイクニュースは写真を使っていたりいかにも本当に起きたかのような文章で信じさせようとしてくる。

そのためフェイクニュースが流れてきても見てしまう人は見分けがつかないため信じてしまい拡散してしまうのではないだろうか。人はフェイクニュースをどのように見分けることができるのだろうか。また、広く拡散したフェイクニュースにはどのような特徴があって、人はそういったフェイクニュースを見てどのように反応するのであろうか。本論文では、過去のフェイクニュースの事例やうわさやデマの定義を挙げながら人々が信じてしまうフェイクニュースにはどのような特徴があるのか調べた。

調べた結果、フェイクニュースにはそれぞれ作る目的があり、信じさせるためにいくつか工夫があることもわかった。また、受信する側にも「流れてきた情報の元を確認しようとせず鵜呑みしてすぐに拡散してしまう」、「間違ってるかもしれないと分かっているでも善意で拡散してしまう」という問題点もあった。フェイクニュースをゼロにすることは難しい。しかし、各自が「メディア・リテラシー」を改めて確認し情報を客観的に判断することで短時間で大量の拡散を阻止することができ、フェイクニュースを少しずつ減らしていけるのではないだろうか。

(上野 友里亜 人間文化学科卒業生)

地域資料の公共図書館ならではの価値ある提供方法について

地域資料とはその図書館が属している地域についての情報や歴史的に価値のあるもの、また自治体が発行しているイベントや政治についての詳細をまとめた小冊子や、フライヤー、また、地域に関係している録音・録画資料のことである。

本論文では公共図書館における地域資料の提供について、本来図書館は利用者の学習をサポートする側であるはずなのに、地域資料の取り扱いに対してはただ単に収集・保存・展示のみをするケースが一般的になってしまっていることが多いケースについて追求していった。また、地方特有の貴重な資料を収集し展示することを図書館で行う際、それらをただ展示するのみならず、専門的で信憑性のある質の高い情報を利用者が自らの学びのために活用しやすいように提供することは可能なかどうかという問いに対する考察を述べていった。

調査ではインターネット上の情報や図書資料のほかに、実際に各地の公共図書館に足を運び、どのようにしてその図書館では地域資料が提供されているのか、また、この提供方法における問題点や、実際に利用してみて気が付いたことを調べ、一般的な提供例と積極的に提供できている例を比較し考察を進めていった。その結果前者は他の図書館や学習施設との地域資料に対する取り組みの着眼点の違いや、この図書館ならではの特色を作ろうと意識せずに地域資料を運用していたこと、後者はその図書館ならではの特徴を活かし、また、今までに前例がなかったことへと積極的に挑戦し、綿密に計画を練り実行できる環境と人材が備わっていた。更に、実際に利用している人々の意見を取り入れ、より実用性が高くだれでも利用することができ、なおかつその図書館の規模に合わせた展開が継続してできていた。

結論として、図書館ならではの専門的でより確実な質の高い情報を利用者が活用できるように提供するためには、図書館で働く人材の根本的な意識改革、各個人が持っている能力を伸ばす人材育成、小さなことからでも行動に移すことができる環境づくり、人々の声を幅広く取り入れ活用できる柔軟性、これらの4つが主に地域資料の効果的で継続可能な提供には必要である。

その提供方法をいかに人々に効果的に、また図書館側が積極的に学習や調査の支援・提案をできるかが地域資料のみならず図書館で取り扱っている資料の数々を有効的に活用していくための要点となる。

(竹花 安純 人間文化学科卒業生)